

みなさまいかがお過ごしでしょうか。

三月二十九日から親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年の慶讃法要が京都西本願寺で始まりました。二〇一二年に行われた親鸞聖人七百五十回大遠忌法要から十年余り、その間に阿弥陀堂や唐門、飛雲閣などの国宝建築の大規模な修復工事が行われました。また、ご門主の代替わりがなされ、それに伴う様々な式典や伝灯奉告法要も勤まりました。西本願寺において常に何かが動いていた日々だったように思います。

坊守は慶讃法要が始まってすぐ、四月一日に参拝させていただきました。長い時間をかけてやつと落ち着いたとでも申しましょるか美しく整えられた両御堂と境内が参拝の人々を迎え入れてくれていました。

この度の法要では、準備期間がコロナ禍だった影響で、参拝できる人数が少ないことが大変残念に思います。ただ、オンラインでのライブ配信が行われています。本願寺ホームページからどなたでも視聴することができます。法要だけでなく、お道具の紹介や仏事の作法の説明などが続いてあり、工夫を凝らして面白く作られています。京都へのお参りはかなわなくとも、ご自宅で今回のご縁に遇っていただくこともお勧めします。

行事予定

五月二十四日

光圓寺 春季永代経法要

二十五日

東京教区 石上光鏡師

両日とも午後一時半より

★サミットの交通規制は二十二日までです

五月 二十六日

ヨガの会

★お知らせ

十月二十四日

秋季永代経法要

二十五日

報恩講

今年のお齋接待のお当番は打越地区です。皆様どうぞよろしくお願いいたします。

報恩講法座のお齋を再開します

新型コロナウイルス感染症拡大防止のためにお休みしておりました秋の報恩講法座でのお齋の接待を今年再開いたします。

今年に入り、公的な見解として新型コロナウイルス感染症をインフルエンザと同等の扱いにしていくこととなり、マスクの着用も任意とされました。これを受けて、ある程度の感染症対策は行いながらもお齋を再開させていただくことにいたしました。

三年間という長い間、お齋の振る舞いがなかったことは大変残念なことでしたが、改めてご縁のある方々との集いや一緒に過ごす時間の大切さを知る時間ともなりました。

久しぶりのお齋のお席にどうぞ皆さまお着きいただきますよう、ご案内申し上げます。

お浄土に興味津々？

今年一月にお勤めしました御正忌法要において、住職の法話の中で、次のような問いかけがありました。

「お浄土は、はるか彼方の遠きにあるのではなく今の私たち生と地続きにあり、お念仏が橋渡ししとなってそこに生まれさせていただくのです。次に続いていくとわかれば、続いていく先、つまりはお浄土のことが知りたくなるものです。」
さあ、私はどうでしょう。お浄土のことについてどれだけの興味を持っているでしょうか。どれだけ知りたいと思っっているでしょうか。

これから進んでいく先にあるものがわかっていれば誰しもその先がどのようなかを知りたくなるものです。
小学生が中学校へ進学していく時を想像してみます。

新しい制服や中学校の建物にワクワクするだけでなく、自分の生活がどのように変わっていくのか、期待と不安の入り混じった気持ちとともに中学校がどのような場所でのようなことをするのか興味が向き、知ろうとするでしょう。

そこには、小学校を卒業して中学校へ入学していくことは必ず



やってくる未来として、何の疑問もなく受け入れている確信があります。

今、私が生きている生と地続きにお浄土があるという確信が私がついているとするならば、私はもつともつとお浄土がどのような世界なのか興味を持つのではないのでしょうか。

思えば、仏説阿弥陀経では浄土がどれだけ素晴らしいか、美しく穏やかな世界であるかが説かれています。そのご法話をお聴聞する機会も多いですが、私の関心の重きはそちらではなく、今ここの生のほうに在るといのが正直なところ。阿弥陀如来の大慈悲のおはたらきに頼み申し、お任せするほかないと思いつつも、その先のお浄土ではなく、今の生をどのように生きていくのかということに私の目は留まったままということに気づかされます。

『歎異抄』に、どれだけお念仏申してもお浄土へすぐさまお参りしたい気持ちにならないと唯円が親鸞聖人に告白するのに対して「私もそうだよ」と親鸞聖人は受けてくださったという有名な一説があります。続けて、そしてそれは煩惱のなせる業だと聖人はお説きになります。続けて、それほどお浄土の素晴らしさを知ったとしても、それでもこの迷いの世界に生きることに執着してしまふほどわが身の煩惱は盛んであり、このような迷いの深い者を阿弥陀如来はことさら悲しんでくださったのだ、それを思えばますます阿弥陀如来の大慈悲は頼もしくおもわれると説かれます。

自らの煩惱の猛々しさに気づくとき、救われないと絶望するのではなく、如来のはたらきの強さに転じて喜びとなす聖人のお導きが有難いと感じます。

みなさまいかがお過ごしでしょうか。

親鸞聖人御誕生八百年五十年、立教開宗八百年の慶讃法要が終わりました。法要期間中に京都国立博物館では特別展「親鸞」が開催されました。西本願寺だけでなく、浄土真宗の各派がそれぞれに所蔵する名宝を集めた特別展覧会ということで拝観してきました。

親鸞聖人が生きた時代から八百年過ぎていくというのに予想以上にたくさん直筆の書が残っていることにまず驚きました。それはどれほど大切に守られてきたかの証であり、どれだけたくさん聖人がお書きになったかの証であります。身近に集まる者達だけでなく、遠く離れた門弟へも精力的に教えを説かれる聖人の姿勢の証でありましょう。

特に圧巻だったのは、国宝の「観無量寿経註」と「阿弥陀経註」でした。お経が記された巻物ですが、そのお経の周囲の紙の余白には親鸞聖人が書き加えられた注釈でビッシリ埋められており、それだけでは足りないばかりに裏面にもビッシリ書き込まれていました。長い迷いと苦悩の時間を過ごされた後に真実の教えに出遇われた親鸞聖人の、その教えに対する信頼と喜びがどれほどのものだったかをひしひしと感じる、まさに名宝でありました。

行事予定



七月 五日 まこと会 総会・夏法座

午後一時半より

★会員各戸ご案内をお送りいたします

八月 十三日 光圓寺 盆法座

午前九時半より

★初盆のご家庭へ各戸ご案内をお送りします

毎月第一火曜日と第三金曜日の午後

本堂にてヨガの会を行っております。

コロナでなまなかった体のリフレッシュに

お気軽にご参加くださいませ。

春季永代経法要が勤まりました

五月二十四日、二十五日に光圓寺春季永代経法要が勤まりました。住職の義弟でもある石上光鏡師に埼玉県よりお越しいただき、初めてご登壇いただきました。

ちようど今年が親鸞聖人御誕生八百五十年、立教開宗八百年にあたることを踏まえて、親鸞聖人の歩みを歴史的な時代背景を交えてお話しいただきました。また、真宗の教えに出遇うことを本に例えて、ここに救われる教えがあるとしてもその本を開かない限り私はその教えに気づくことができない。その本を開く行為がお聴聞であり、お聴聞を通してそこにある救いに気づくことが出来るのです。決して私を見捨てることのない存在が居てくださると受け止めることができたら、あたたかで安心な日々が開けてくるとお示し下さいました。



死ぬもよし　生きるもまたよし

生き死にの　峠に立ちて　ただ念仏をする

梅原眞隆和上（一八八五～一九六六）

「このまま一人で長生きしてしまうのが恐いので、早く逝ってしまいたい」をいう言葉を耳にすることがあります。しかしながら、その一方で病氣予防のために食事や薬など日頃から気を使って過ごす姿があります。

そのような態度をおかしな矛盾と捉えることもできますが、これが私たちの真実の姿なのかもしれません。結局、多くの人が「死ぬもよし　生きるもまたよし」ではなく、「死ぬも恐く　生きるもまた恐い」と考えながらいきっているのではないのでしょうか。

死が近くに迫った際に、「今夜が峠だ」という言葉がよく使われます。しかし、無常の世界に生きる私たちは、普段から「生」と「死」の峠に常に立たされています。このことを忘れてはなりません。

そのような状況の中で、多くの不安を抱えている私を救いとするために、阿弥陀さまはお浄土を建立されました。そして、私を苦悩から解放するために阿弥陀さまは「南無阿弥陀仏」のお念仏を届けてくださったのです。お念仏は他の誰のためでもなく、まさにこの私のためにあります。

お念仏がまさに私自身のためにあることに気づかされ、阿弥陀さまの広大な慈悲に真に触れたときに、「生きることでも死ぬこともただただ有り難い」という世界が開けてくるのです。最後に梅原和上の句をもう一つ。

念仏せよ　ただ念仏せよ　念仏せよ

大悲回向の南無阿弥陀仏

（『大乘』六月号　お寺の掲示板より）

今回は、『大乘』六月号のお寺の掲示板というコラムから抜粋してご紹介させていただきました。

梅原和上は『歎異抄』を愛読し、親鸞聖人の御跡を慕いつつ、一途に浄土真宗の研究に人生をささげた方でした。二つの句の文字だけ見れば念仏するという行為のみを強く勧めているように感じるかもしれませんが、声に出して読んでみるとその根底にはお念仏に対する確固たる信頼が息づいていることを感じます。「死ぬも恐く、生きるもまた恐い」私たちではありますが、阿弥陀如来のご本願に触れ、そのお心に気づかされた時、お念仏への強い信頼が生まれます。これらの句は和上のそのお心のままに詠まれた句でありますように。

梅原和上のただ一つの道を得た喜びが怒濤の如く感じられます。

（坊守）

まことと会便り

2023/10

みなさまいかがお過ごしでしょうか。

先日、崇徳教社主催の講演会に参加させていただきました。その第二部に二階堂和美さんのコンサートがありました。大竹市の浄土真宗のお寺の住職さんであり、シンガーソングライターとしても全国的に活躍されていますので皆さんご存じの方も多いと思います。以前はコンサート活動なども積極的にされていました。コロナ禍での中止も多く、ずいぶん久しぶりのコンサートでした。

コンサートの中で、二階堂さんはコロナ禍の間にお父様とご主人とを続けて亡くされたこと、そしてそれがどちらも突然のお別れだったこととお話しされながら、そのころに作られた曲を披露してくださいました。

「人は死ぬ。生き物はみな死ぬ。生まれてきたから死ぬ。知っていた。知っていた。知っていた。」という歌詞は、「死」というものを頭では知ったつもりになっていたが、心では本当に分かっていたいなかったという叫びのようでした。二階堂さんの深い悲しみを感じました。お寺に生まれ、たくさんの人の死に関わってきた僧侶であっても、大切な人の死の悲しみからは逃れようはありません。それでもただ一心に今を生き抜こうとする。二階堂さんの姿は輝いて見えました。

行事予定



十月 二十日 ヨガの会

十月 十八日 まこと会 念仏奉仕

午後一時半より三時まで

* 申込不要・どなたでもご参加いただけます

* 雑巾を一枚お持ちください

十月 二十四日 光圓寺 秋季永代経法要

二十五日 報恩講

講師 香川孝志師

二十五日報恩講には三年ぶりにお斉があります

今年のお接待は打越地区の皆様です

どうぞよろしく願います。

光圓寺 報恩講参りのお知らせ

例年通りに、各ご家庭への報恩講参りを左記の日程で参ります。今後変更の可能性もございますので、各ご家庭へのお知らせにて、再度ご確認ください。

十一月十七日 皆実町地区

十一月二十日 楠那・日宇那地区

十一月二十一日 己斐地区

十一月二十四日 宇品地区

十一月二十七日 南観音中・西地区

十一月二十八日 南観音東地区

十二月八・九・十日 丹那地区

十二月十一日 本浦地区

十二月十四日 大河地区(南大河・山城町)

十二月十五日 大河地区(北大河・旭町)

十二月十八・十九日 打越地区

十二月二十日 吉島地区

新しくお参りをご希望の方はお寺までお問い合わせください。他の地区でもお参り致します。

☎ (082) 231-3400

一人一人が お浄土を飾っていく

一輪一輪の花になる

かけはし じつえん
梯 實圓師

法語カレンダー十二月のことば

「死んだらどうなる？」

この問いは、はるか昔から人々の心であり、そしてその答えは未だかつてまだ誰にもわからない問いとして有り続けています。人類の長い歴史の中でこの問いの答えを見出すべく、様々な宗教が生まれました。それらの考え方を大きく分けるとだいたい六つに分かれるそうです。死んだら自然に還っていくというものや別の生き物に生まれ変わるといふもの、別の世界に生き返る、ひっそりと子孫を見守る、子孫の心の中に在り続ける、そしてすべて消滅するというもの。

私たち浄土真宗の考え方はお浄土へ還らせていただくというものです。この世の命を生き抜いた先で私たちは皆、阿弥陀如来のおはたらきによってお浄土へ生まれさせていただけます。

梯和上は、「私どもは阿弥陀如来さまを共通のみ親と仰ぐ兄弟姉妹であって、お互いに仏につき従う者の一人として如来さまのお浄土を飾るひとつに参加させていただくのです」とお示しになりました。『仏説阿弥陀経』の中にもお浄土には色とりどりの蓮の花が咲き乱れ、清らかな香りを漂わせているとの一節があります。それぞれが個性のままに、何者にも比較されることなく、排除されることなく、そこにあり

続けることができる。それがお浄土という世界です。

蓮の花は泥沼にありながら泥に染まらず清らかな気高さをもつてその泥沼を花園へ変えます。そこから蓮の花は仏さまを象徴する花とされていきます。ここでいう泥沼とは私たちが身を置く世界そのものです。この世は私利私欲に満ち溢れ、私たちもまた醜い煩惱にまみれた存在です。しかしながら、阿弥陀様の「必ず救う」のご本願の心を受け入れたならば、今まで自分の都合だけでものを考え行動していたことをあさましく恥ずかしい姿であったと、わが身を顧みる気づきを与えていただけます。もちろん相も変わらぬ煩惱は起こってきますが、「恥ずべきこと」という慎みをもって生きていこうとすることができるようになります。煩惱をなくせるかどうかの問題ではなく、そのことを肯定するか、否定するかの、生き方の問題なのです。

この世に咲いた花は必ず滅んでいかねばなりません。求むべきは滅ぶことのない浄土です。私たちは浄土に生まれ往く

命を今生きているのであって、滅びゆく命を生きているのではなく、あるべき命を今生きようとする。お浄土を飾る一つの花になるべく、それぞれの命を生きようとする。



まじりと会便り

2023/11

みなさまいかがお過ごしでしょうか。

十月二十四日に秋季永代経法要、翌二十五日に報恩講が無事に勤まりました。コロナウイルス感染症拡大防止のために縮小しておりました法座も今年の春からは通常通りの開催ができるようになり、今回の法座からは報恩講のお斉を再開させていただきました。

丸々三年お休みをしてみようと、毎年続けていた頃よりもいろいろ不安な気持ちが強くなりましたが、皆さまのおかげで無事に再開することができました。お席について召し上がった皆さまからも「美味しかった」という声をたくさんいただき、嬉しいかぎりです。お当番だった打越地区を中心にお手伝いに来てくださった皆さま、本当にありがとうございました。

作る人がいて食べる人がいて、両方がいないとお斉にはなりません。ご参拝の皆さま、どうぞご遠慮なくお斉のお席に着いて下さい。昼席から参拝される皆さまも、いままでお席に着かれたことの無い皆さまも、これからの機会に是非ともお席に着いて召し上がって頂きたいと思えます。

行事予定



十一月十七日(金) ヨガの会

十一月 五日(火) ヨガの会

十二月 十五日(金) ヨガの会

ヨガの会は 一時半より 光圓寺 本堂

令和六年

一月十二日(金) 御正忌法要

午後一時半より 光圓寺本堂

講師 住職

※例年と日にちが変わっております

報恩講 ありがとうございます

今年は三年ぶりに北九州から香川孝志師に

ご登壇頂きました。

前回到引き続き、永代経法要や報恩講のいわれや法座の意味を詳しくお話しくださいました。

お寺の本堂はその建物が大事なのではなく、その中で行われる法座が大事なのだということ。人が集まり、お経を読み、その教えをいただきながら後の世代へ受け渡していくという営みの大切さを強くお示しくださいました。コロナ禍を経たために法座へ向かう意識が薄れてしまうことを大いに危惧されており、そのお示しに私たちも気持ちを引き締まる思いがしました



生の依りどころを与え

死の帰するところを与えるのが南無阿弥陀仏

金子 大榮師

法語カレンダー十一月のことば

現代では若い人の多くが、自分の苦悩やこの世をどう生きていくか、あるいは幸せになるにはどのような宗教が自分にふさわしいのか、その解決法を情報収集するような態度で宗教に触れています。

しかし、それは単なる情報の消費でしかなく、へたをすれば次から次へと情報を取り込んだことによって、かえって迷いを深めてしまうことにもなりかねません。

どのような教えであつても、それを利用し、何かに至るための手段のように考えるのではなく、その教えそのものが私たちの行き着くところ「目的」といitただかなくはてなりません。

宗教に遇うということは、自分が何者であるかが知らされるということ。そこから自分の考えを中心に生きてきた生き方が、その考えを中心にして生きていく生き方へと転換されていくのです。



浄土真宗は阿弥陀仏の本願を宗とする教えです。

本願とは私たちにかけられた阿弥陀仏の願いです。自らの力では到底迷いの世界から抜け出ることのできない私たちを、すべての悲しみ、苦しみを超えた平等なる世界「極楽浄土」に生まれせしめたいという阿弥陀仏の願いです。それは私たちが救ってくれと求めたからかけられた願いではなく、阿弥陀仏の方からかけてくださった願いです。求める前からかけられ、ととのえられた願いです。私たちが、自分が何者であるかを知るといふことは、阿弥陀仏から願いをかけられている私であったと知らされることです。

阿弥陀仏はこの私に何も求めてはおられません。何の条件を付けることなく、欲深く罪深くにしか生きることのできない私を救ってくださいると願ってくださいいます。私たちにできることはこの願いを受け入れてお念仏させて頂く、これより他にはありません。

ただお念仏することに向かうことができず、教えを利用して何らかの役に立つかたちにしようとする独りよがりな心からなかなか離れられない私たちに、生の依りどころを与え、死の帰するところを与えてくださるのが南無阿弥陀仏のお念仏であると、金子師は言われたのでした。